本興寺だより

令和二年　十二月
第二一六号

「我もまたこれ世の父　諸の苦患を救う者なり　凡夫の顛倒（てんどう）せるをもって實には在れども而も滅すと言う」

（法華経　如来壽量品第十六）

師走に入りました、あわただしさと一年の早さを感じます。今年はコロナウイルスに振り回され、大変な年でしたが、今なお感染が拡大を続け年を越しそうなのは残念なことです。終息の時が駆け足で来て欲しいものです。

一年の間には思いがけない出来事にもたくさん出会います。例え想定されたことであっても、日々苦悩や心配は誰でも尽きません。

人の一生は何時も悩みや患いを背負って生きています。それが軽く感じるなら、何事も前を見て軽やかに進めますが、どうしようもない重荷に感じると、重量を積んだ手押し車を押すように、前へ進むにもやっとの思いとなり、ちょっとした人生の坂道をも乗り越えられない消極的な気持ちになります。

仏様は、冒頭の文のように私達に、人が人生で体験する苦悩を克服する智慧と力を差し伸べて救おうと教えを説いているのだと云われています。

人は何故苦悩の連鎖からなかなか抜けられないのか？それは私達の心が顛倒しているからだと。

「顛倒」とは、逆さまになっているという意味です。何が逆さまになっているかといえば、私達の物の見方、考え方が仏様の正しい真理に照らして見ると逆さまになっているのだということです。

本来は大切なものを価値のないものと考え、本来正しいものを間違っていると見ていることです。

仏様は私達を凡夫（ぼんぶ）と呼ばれていますが、凡夫とは愚かな人という意味です。仏様の眼から見て何故私達は愚かであるかというと、人生で最も大切にしなければならない宝物を、自分の心の外に求めて生きているからだと云われます。その結果、人は物欲や名誉欲の虜になってしまい、己の欲望の火に心も体力も焼かれて苦しんでいるのだと。

本当の人生の宝物とは、生きる希望、生きる喜びを与えてくれるものです。その宝物こそ、自分の心を慰め、豊かにし、安らかにするものです。

その本当に求めなければならない宝物は己の心の中にあることを示され、それに気づかない凡夫（私達）を憂いておられるのです。

人にはこの世で手に入れたい宝が沢山あります。財産、名誉、地位、信頼など。もしそれらの望みを手にすることができればどんなに幸せになれるだろうかと誰もが思います。しかし世の中に求める宝物（幸せ）は一度手に入れても、もっともっと欲しいという飽くなき欲望と、得た物を失う不安が常に付きまといます。自分の心の中にこの世に勝る真実の宝物があると、誰が信じるでしょうか。

人は普段外の世界ばかり見ていて自身の心の世界を見ようとはしません。しかし苦しい時、悲しい時には無意識の内に自分の心と向き合います。それは人生の全ての答えは自分の心の中にその鍵があることを魂が知っているからだと云われます。しかし悩みが解決すればまた自分の心の外に宝物を求めて旅に出ます。これが私達が凡夫と呼ばれ、顛倒した生き方をしていると云われる所以です。

この生き方が、人生の苦を増やし嫌なことを重荷として引きずるのだということです。

顛倒した考えや心の最たるものは、「神仏はました す」「魂は不滅である」という事実を否定していることであると教えています。何時かは無くなる肉体の欲望に負け、お金や物に縛られて、自分の真の宝物を犠牲にして人生を浪費していると云われます。

日本の漫画の「鬼滅の刃」（きめつのやいば）が映画、コミック本ともに大ブレークしています。

大正時代を舞台に、主人公が家族を鬼に殺され、唯一生き残った妹も鬼と化したため、この妹を人間に戻すために鬼と戦う姿を描いたものです。

人間の心の底には、鬼という邪悪なものを許さない本来の尊い仏性があるから共鳴するのです。人は他人のことなら立派な批評家となれ、他人の心の鬼はすぐ見つけることが出来ますが、自分のことは、例え心の中が鬼で充満されていてもなかなか気付かないのです。自分の考え、行動は絶対に正しいという「正義の刃」を振りかざしているために気付けないのです。

日蓮聖人は「小さい罪であっても懺悔（ざんげ）しなければ悪道を免れない」と云われています。懺悔の気持ちを持つことは、自分の考えや行いが本当に間違いないのか？自問自答の心と他人の言葉に耳を傾ける心を忘れないことなのです。

自分の絶対の正義で凝り固まり、鬼と化している己の心を知り改めた時、神仏が側（そば）で救いの手を差し伸べておられることに気付けるのだと。

今年の色々な試練を踏まえて、何時でも心を顛倒させず鬼と化さず、新たな年に向かいたいものです。

本年も有難うございました。

合掌

本興寺住職　中谷聰秀